

令和元年12月19日

秩父市議会議長 木村隆彦様

まちづくり委員長 黒澤秀之

### まちづくり委員会行政視察報告書

- 1 期 日 令和元年10月1日（火）～3日（木）
- 2 視察先 奈良県十津川村  
一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューロー（和歌山県田辺市）  
京都府城陽市
- 3 参加者 委員長 黒澤秀之  
委員 清野和彦 委員 江田 徹  
委員 本橋 貢 委員 松澤 一雄

#### 4 視察目的

奈良県十津川村 「十津川村SDGs未来都市計画に基づく施策の展開」

##### ○ 村の概要

十津川村は、紀伊半島の中心部に位置し、面積は672.38km<sup>2</sup>。奈良県の約5分の1の面積を有する日本一大きな村である。村の96%が森林で、1,000mを超す山々に四囲された急峻な山岳地帯。平地は、ほとんど無く、急峻な斜面にへばりつくように200の集落が点在している。

主要産業は、豊かな森林資源を活用した「林業」と、熊野古道の世界遺産登録や、日本初の源泉かけ流し温泉の歴史・自然資源を活かした「観光業」。人口は3,340人、高齢化率44.4%と少子高齢化・過疎化の進んでいる村である。古くより土砂災害、水害の多発地帯であり、2011年9月の台風12号による豪雨が引き起こし



た道路の寸断、山腹崩壊、土砂ダムの発生と河川の逆流等により、人命や生活環境とともに林業や観光業に甚大な被害が発生した。現在もなお、村のいたるところに山腹崩壊の未復旧箇所が点在しており、道路インフラと山腹崩壊の改修における公共事業が積極的に行われている。

## ○ 事業の概要

2030年のあるべき姿として、第5次十津川村総合計画「むらづくりの羅針盤」(2017年度～2026年度)で示されている「十津川の維持・再生・成熟のためのむらづくりの考え方」に基づき、取り組むべき3点の課題(林業と観光業のバランスの改善、住環境整備を含めた定住促進、災害に強い森づくり)を設定。林業振興や観光振興を目的化させるのではなく、村が抱える各種の課題を経済面・社会面・環境面から統合的に解決していくSDGs的なアプローチの導入及び、その持続的な発展を図るための体制を構築している。十津川村の持続可能な発展に向けた取り組みのイメージと、課題解決の方向性(新たな価値)について、SDGsが掲げる17のゴールのうち、7つのゴール及びそれぞれのターゲットに対応している。

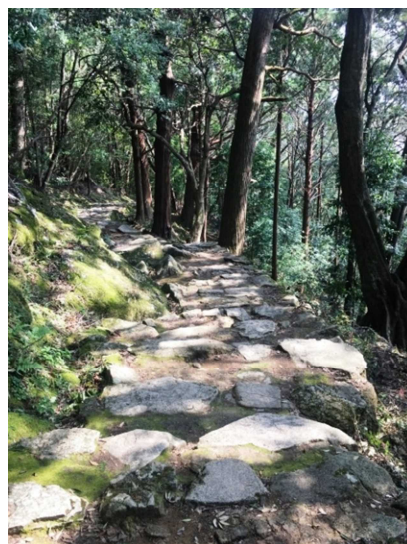
## 一般社団法人 田辺市熊野ツーリズムビューロー (和歌山県田辺市) 「持続可能で質の高い観光施策の展開」



## ○ 団体の概要

平成16年7月に、熊野古道を含む「紀伊山地の霊場と参詣道」が、世界遺産リストに登録された。翌平成17年には、市町村合併により新「田辺市」としてスタートしたことを契機とし、平成18年5月に田辺市内の5つの既存の観光協会(田辺・龍神・大塔・中辺路町・熊野本宮)を構成団体として設立された官民共同の観光プロモーション団体である。

世界を視野に入れた本物の観光地づくり、そして、誰にでも優しく、おもてなしの心が溢れる持続可能な観光地としての田辺市づくりを、「行政」と「民間」がバランスを保ちながら、意識の共有と協働を強く意識して諸活動に取り組んでいる。また、広域的な地域内の連携と、地域と来訪客をつなぐ中間支援組織(プラットフォーム)を担う、地域に密着した旅行業として事業を展開している。なお、観光客ターゲットは、主に欧米豪としている。



## ○ 事業の概要

熊野古道の自然や歴史をテーマにしたウォーキングなどのガイドツアー（着地型旅行商品等）を造成・販売しており、こだわりを大切にしながら、ブームよりもルーツ、開発よりも保全、マスよりも個人を重視している。総収入額のうち業務委託受任が56%で、田辺市から観光プロモーションの業務（プレスツアー、旅行会社向けのファミトリップ、新聞・雑誌、テレビへの情報提供、ウェブサイトの活用など）を受託している。旅行業が31%、行政からの補助金が7%、会費収入とその他が3%となっている。

## 京都府城陽市 「第2次城陽市観光振興計画に基づく施策の展開」

### ○ 市の概要

城陽市は、京都、奈良のほぼ中間にあり、山城盆地の中央部に位置し、東西9.0km南北5.4km、総面積は32.74km<sup>2</sup>。昭和40年代には京都・大阪のベッドタウンとして急激に開発が進み、昭和59年には、総人口が8万人を超えたが、平成7年の85,398人をピークに減少に転じてお



り、平成25年4月1日現在で79,370人。水稲をはじめ、花しょうぶなどの湧水花きや、木津川堤を中心とした茶の栽培が盛んで、寺田イモ（さつまいも）、梅、イチジクなどの特産物があり、金銀糸加工業は全国生産の約50%を占めている。また、京の梅どころとして名高い青谷梅林は、府下最大規模を誇り、梅まつり開催時には約2万人もの観光客が訪れ、秋の寺田の荒州地区では、寺田イモのイモ掘り客で賑わうなど自然豊かなまちである。

### ○ 事業の概要

平成35年度（令和5年度）全線開通予定の新名神高速道路、現在企業立地が進んでいる久世荒内・寺田塚本地区土地区画整理事業や京都山城白坂テクノパーク、新名神高速道路の整備に併せて進めている東部丘陵地整備事業、平成35年（令和5年）春のJR奈良線の高速化・複線化など、大規模なプロジェクトが立て続けに進行している。これらの大きなインパクトを活用し、大きく変わっていく「ニュー城陽」の実現に向け、さらなる観光振興を進めていく必要があると同時に、近年のライフスタイルの変化や、少子高齢化など、日々変化していく社会情勢や観光客のニーズを踏まえた、これまで以上の観光の振興を図る必要があることから、平成29年から今後10年間の観光の指針となる「第2次城陽市観光振興計画」を策定している。

「～大交流のステージへ～立ち寄りたくなるまち・城陽」を基本理念とし、観光協会・市民・農業者・商工業者や各種団体などと行政が、それぞれの役割分担のなかで連携・協力し、戦略、アクションプランや重点施策に取り組んでいる。

【まちづくり委員会 行政視察を終えて 黒澤秀之】

まちづくり委員会として、今後の秩父市における持続可能な開発目標（SDGs）に絡めた未来都市計画、持続可能で質の高い観光施策、観光振興計画策定における先進自治体として、奈良県十津川村、和歌山県田辺市、京都府城陽市の行政視察を行った。十津川村は、奈良県の1/5を占める日本一の村であるが、その96%を森林が占めており、人口減少・少子高齢化によって、消滅可能性都市として位置づけられており、SDGsを基に森林保全と観光振興を融合させた事業計画がおおいに参考になった。田辺市においては、世界遺産の熊野古道を基軸としたインバウンド施策に秀でており、街なかも欧米豪における観光客の姿が目立った。まさにインバウンドの先進自治体の取り組みを学ぶことができた。一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューローは、秩父市におけるおもてなし観光公社や日本百観音における秩父札所巡礼を考慮すれば、今後の秩父市における観光施策としての取り組みと重なる部分が多い。取り分け、県や市町村における行政の縦割り感や行政業務権限の垣根を超えた取り組みに職員のやる気、バイタリティーを感じた。一方、城陽市においては、観光資源数に乏しさがあるとの認識のもと、交流人口の増加策をいかに行うか。住民における観光や文化に対する認識のズレを克服する取り組みとして参考になった。今回の行政視察では、観光施策を重点に視察を実施したわけだが、背景には、人口減少・少子高齢化という課題が横たわっている。域外からの外貨獲得策が地域のインフラを守り、生活環境の維持に貢献する取り組みとして、各自治体の観光施策に対する取り組みは大変に参考となった。

【秩父はさらに訪日外国人に選ばれる地域になれる 清野和彦】

外国人観光客にとって日本観光の代名詞とも言える京都や奈良などの大観光地へのマストツーリズムが頭打ちになる一方で、田辺市をはじめとする熊野地域に訪れるFIT（外国個人旅行）が増えているという現実、訪日観光の動向が変わりつつあることを示しており、インバウンド戦略を考える上でとても重要である。訪日観光客は、今後より一層、日本の精神性や文化・風土などへの出会いを求めて、日本の奥深くに来訪することが予想される。

そのような情勢において重要なのは、たとえ派手ではなくても本物を大切にすることだと感じる。すでに秩父地域にある歴史的・文化的資源を磨き、より分かりやすく丁寧に伝える努力が重要であり、そのためにもターゲットをより明確化し、そのターゲットに対してどのように資源を投入するかの戦略づくりが急務である。ニッチを攻めることで、その周辺の領域にもポジティブな影響を及ぼすことができるだろう。戦略をつくり、地域住民を巻き込んだ観光地域づくりを進めていくプレイヤーには、ターゲット国出身の人材の登用が有効であると考えている。それぞれの国民や文化圏には暗黙知的な趣向性や感受性の傾向があり、外部者が深く理解するのは困難だが、そこにこそ核心的なニーズがあることが予想されるためである。

2020年東京オリンピック以降の秩父市・秩父地域はさらに沢山の外国人観光客の方々を選ばれる地域となることができ、人口減少社会においても観光産業を地域を支える産業として維持発展させていくことはできる、という確信を一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューローへの視察で掴むことができた。

## 【まちづくり委員会行政視察 江田 徹】

10月1日から3日の計3日間で、まちづくり委員会の行政視察が行われた。奈良県十津川村、和歌山県田辺市、京都府城陽市それぞれで行われたが、今回は田辺市の報告をする。

田辺市は紀伊半島の西側に位置し、太平洋が面している温暖な気候を活かした柑橘類や梅、多彩な温泉、世界遺産にも指定された熊野古道など、近年は特に外国人観光客の増加が顕著であり、平成18年に田辺市熊野ツーリズムビューローを設立。主に田辺市周辺の観光プロモーション、外国人観光客への対応、地域全体をカバーする着地型観光に特化した対応を行っていた。世界遺産に熊野古道が登録された直後から、急激に増えた観光客の対応について、苦い経験をもとに持続可能で質の高い観光地を目指すことを決め、外国人を呼ぶには外国人の感性が必要と、地域にいた外国語指導助手（ALT）を呼び込み、外からの視線を活かしてプロモーションや現地のレベルアップ等を図っていた。質疑では看板等のローマ字表記か英語表記かのガイドラインについて質問をして、統一したガイドラインを作ることにより県や周辺市町村も同様に動いていることが確認でき、秩父市でも同じように取り組む必要があると感じた。また、現地のレベルアップを図るため田辺、熊野の魅力を再度見直し、田舎の生活と文化、精神的な文化、伝統的な宿、和食、人々のぬくもりを感じてもらえるよう、その地域の空気ありのままを感じたい外国人観光客のニーズに応えるためのワークショップも盛んに行なわれていた。地域をもう一度見直し、背伸びをしないが、現代に合った柔軟な対応が必要だと感じた。

## 【まちづくり委員会視察を終えて 本橋 貢】

奈良県十津川村では、「持続可能な森林保全及び観光振興による十津川村SDGsモデル構想」の説明を受けた。奈良県の5分の1、日本一広い村は琵琶湖や淡路島よりも大きい。村の96%が森林で、急峻な地形の穏やかな部分に200以上の集落が点在し、過疎・少子高齢化が進んでいる。十津川村の観光資源では、60度から70度の高温の「源泉かけ流しの温泉」が3か所あるのは魅力的である。また、生活用としては日本一の「谷瀬の吊り橋」（長さ297m）や「瀨峡」などがある。さらに、世界遺産・熊野参詣道小辺路には外国人観光客が増えている。2011年9月の紀伊半島大水害で被災し「山を守る」という原点に大きく舵を切り、「林業再生に村の未来をかける」方向に向かっている。

和歌山県田辺市では、「持続可能で質の高い観光施策」の説明を受けた。100年先を見据えた持続可能な観光地を目指して「田辺市熊野ツーリズムビューロー」を設立し、世界遺産と文化の香る城下町・田辺を世界に向けて発信している。田辺駅や観光案内所では、多くの外国人観光客が見られた。熊野古道に観光に来られた方の、大きな荷物を有料で運搬するサービスも順調に伸びている。世界遺産と温泉があるのは、観光地としてはとても強みである。

京都府城陽市では、「第2次城陽市観光振興計画に基づく施策」の説明を受けた。城陽市では鉄道駅周辺に宿泊施設は無いが、年間を通して様々なイベントを行い観光客の集客を行っている。新東名高速道路には、城陽スマートインターチェンジ（仮称）ができる。そこに、大型商業施設を誘致し「人・物・情報・サービス」などが行きかう、「ハブ都市」の可能性が秘められていると感じた。

【 十津川 S D G s モデル 構 想 に つ い て 松 澤 一 雄 】

まちづくり委員会として、奈良県十津川村の「持続可能な森林保全及び観光振興によ S D G s 未来都市計画」、和歌山県田辺市の「熊野古道を活かした観光政策」、京都府城陽市の「第2次観光振興計画に基づく施策の展開」についての研修を目的とした行政視察をしたが、主に十津川村の実態について報告する。

十津川村は東京23区よりも広い面積、奈良県の約5分の1を占める約672㎏を有する「日本一広い村」である。その面積の96%が森林であり、1,000mを超す山々に四囲された急峻な山岳地帯で平地は殆ど無く、その斜面に200の集落が点在し、人口は昭和35年の15,000人をピークに減少し、2018年7月現在では3,340人となっている。

かかる状況下において、持続可能な森林保全及び観光振興による十津川村 S D G s 構想を策定し、林業再生及び観光業に村の未来をかけている。紀伊半島の中央に位置する地域の課題として、「林業と観光業のバランスの改善」、「住環境整備を含めた定住促進」、「災害に強い森づくり」に取り組み、将来のあるべき姿に向けた計画を樹立している。

モデル構想は、地域の特徴を考慮して、豊かな森林を活用した林業と近隣に跨る熊野古道が世界遺産に登録されたことによるインバウンド観光施策、また源泉かけ流し温泉等の豊富な自然環境を活かした観光業の振興策により、林業と観光業の総合的な事業運営による産業創出、加えて森林保全による防災機能強化による安心安全な村のあるべき姿を目指している。

紀伊半島全域に及ぶ熊野古道と豊富な森林資源の活用は、村おこしの大きな財産と思える。

.....



十津川村議会委員会室にて



熊野トラベル会議室にて



城陽市議会委員会室にて